

「学校読書調査」から見る戦後の小中高生の読書傾向

比 佐 篤

はじめに

「こどもたちの読書の低迷状態を見ると、日本の将来に対して不安を禁じ得ない。日本では、一部の人がだけが読書し、大部分の人はマンガと雑誌だけを読む、という状況になってしまうのではなかろうか」¹⁾。これは、1995年に実施された、第41回学校読書調査の報告に対するコメントからの引用である。学校読書調査とは、4年生以上の小学生および中学生と高校生を対象にして、全国学校図書館協議会と毎日新聞社が共同で1954年より毎年行っている、読書に関する調査である²⁾。この調査は6月に実施され、1か月の間に本や雑誌をそれぞれ何冊ずつ読んだかについてと、読書に関連する諸テーマについてのアンケート調査を行っている³⁾。2014年の段階で、例年通り1万人以上の小中高生を対象としていて、小中学生は地域や都市の規模を、高校生は全日制における学科別の在籍生徒数の比率に応じて対象校を定めており、信頼度の高いデータと言える⁴⁾。この調査によって、月に1冊も本を読まない児童や生徒の割合を示す不読書率と、読んだ冊数の平均が判明する。

さらに、どのような本や雑誌を読んだのかについてのアンケートも行われており、具体的な読書内容の傾向も窺い知れる。

さて、冒頭にあげたコメントが述べる通り、1995年の不読書率は中学生の男子が53.7%で女子が39.1%、高校生の男子が65.1%で女子が58.5%と、小学生と中学女子を除いて不読書率は半数を超えている。ところで、こうした警句は昔からしばしば耳にしてきたと思われるが、いったいいつごろからそうした事態が生じているのであろうか。学校読書調査はすでに50年以上にわたって実施されており、長期的な状況を検討するのに格好の素材である。そこで本稿では、「学校読書調査」の総体的な検討に基づいて、小中高生の読書状況の実態に迫ると共に、どのように対応していくべきかについての展望を述べてみたい。

一 不読書率と読書冊数の変遷

まずは、学校読書調査に基づき、不読書率と読書冊数の推移を確認する。全年度の不読書率をグラフ

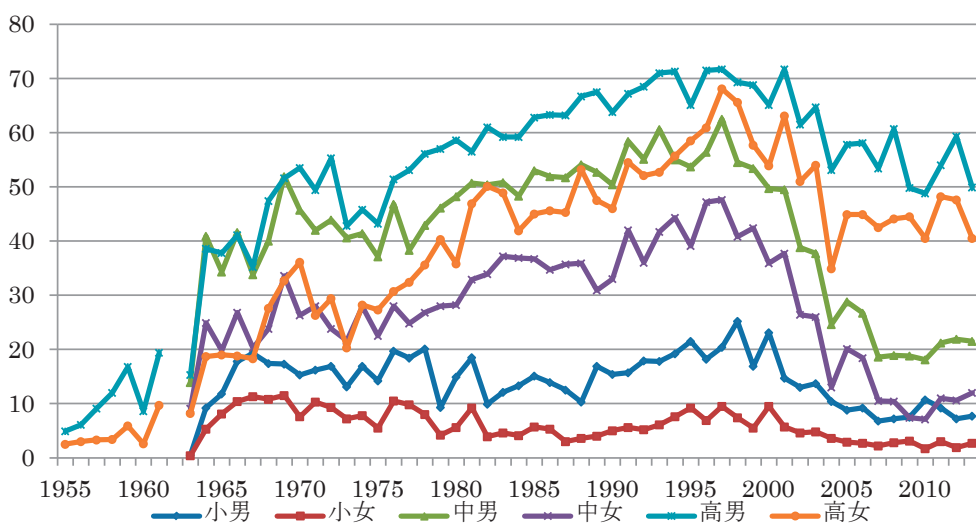


図1 小中高生の不読書率（学校読書調査、1955年～2013年（1962年はデータなし））
（小中学生は1963年から調査を行っている）

化したのが図1である。小中高生ともに1960年代半ばに急上昇している。ただし、小学生はそこから横ばい傾向が続き、2000年代に入ると減少している。中高生も、1990年代末まで緩やかな上昇傾向にあるものの、同じく2000年代には減っているのが分かる。高校生はやや高止まりしているものの、中学生は低い水準のまま現在に至っている。

同様の傾向は、1か月あたりの読書冊数の変遷を示した図2からも窺い知れる。小学生については、1970年代よりも1980・90年代の方が読書冊数は増加している。さらに2000年代には、小学生だけではなく中学生の読書冊数も、調査開始以来で最多となっている。高校生については、1990年代末に至るまで緩やかな減少傾向にあったものの、やはり2000年代に入るとわずかだが上昇している。

このように、読書冊数と不読書率のデータのいずれからでも、2000年代以後の小中高生は明らかに本を読むようになってきている事実が判明する。実は同様の指摘はすでになされている。たとえば、末次則子と今村秀夫、秋田喜代美、神永正博らは、学校読書調査の結果に基づき、小中高生の読書傾向が2000年に入って改善傾向にあるとそれぞれ指摘している⁵⁾。加えて米谷茂則は、学校読書調査を行う5月に本を1冊も読まなかったからと言って、本を全く読まないと決めつけるべきではないと主張している。実際に、全国学校図書館協議会が1993年に実施した、1年間に本を読んだことがあるかという調査では、最も低い高校生でも、本を読む者は85%を超えている⁶⁾。

2000年代に入って読書をする小中高生、特に小学生が増えているが、これは朝の読書運動の効果が

現れていると考えてよいだろう⁷⁾。朝の読書運動とは、1日の授業が始まる前に十分ほどの読書時間を設定し、自由に好きな本を黙読するというものである。朝の読書推進協議会の公式サイトにて公表されているデータによれば、地域ごとの普及率にばらつきはあるものの、確実に全国で普及しつつある⁸⁾。朝の読書運動と読書状況の関連性は、2007年の学校読書調査にて行われた、全校一斉読書で何が変わったと考えたかの調査で確認できる。これによれば、本を読むことが増えたと答えたのは、最も高い中学生女子で58.1%にのぼり、最も低い高校生男子でも34.3%であった。ただし、朝の読書運動の普及率は2014年3月の時点で、小中学校は共に80%と高いが、高校は43%とやや低めである。となれば、特に高校生に関して、朝の読書運動だけでは不読書率が減少した理由を説明できるとは言い難い。上記の文献では、この点に関する説明は特になされていない。これに関しては、上記の文献では取り上げられていない、1970年代後半以前の状況が意味を持つと考えられる。

上述した通り、1960年代半ばには急激に不読書率が上昇し、それ以後も漸増し続けた。その原因としてまず考えられるのは、テレビの影響であろう。図3は、テレビの普及率と不読書率を合わせたグラフである。これを見ると、白黒テレビの普及と1960年代後半の読書をしない小中高生の増加との間に、明らかな相関関係を読み取れる。

となると、新しいメディアの登場が不読書率の上昇を引き起こすという推論が成り立つ。実際にこれ以後も、不読書率の上昇とリンクするように、マン

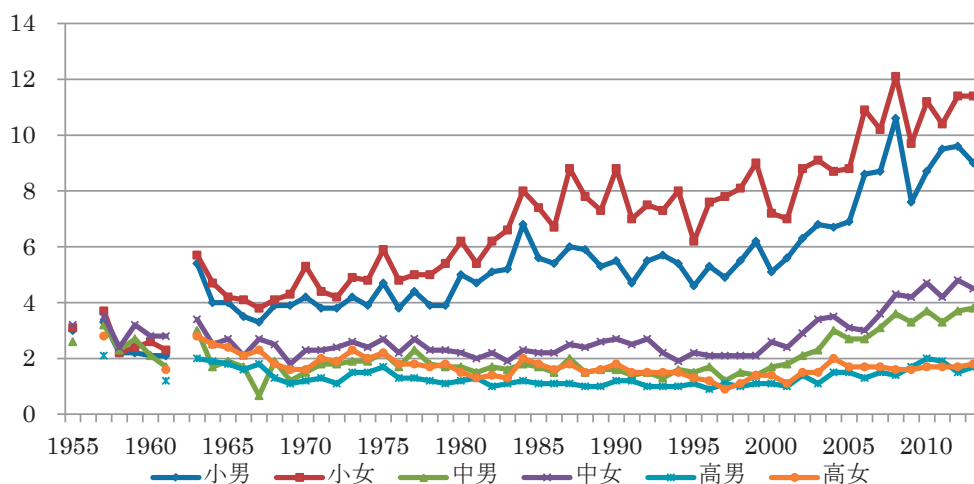


図2 小中高生の読書冊数（学校読書調査、1955年～2013年（1956・62年はデータなし））
（高校生は、1957年を除き、1961年から調査を行っている）

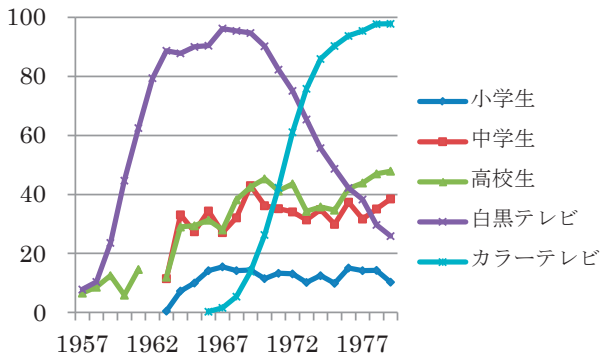


図3 テレビの普及率と不読書率

岡田滋男「不読児——“本離れ”か「本ざらい」か」『学校読書調査25年——あすの読書教育を考える』毎日新聞社、1980年、97頁、図3-2より作成

ガや家庭用ゲーム機などの若者を主たる対象とした新たなメディアが続々と現れていく。

ただし新しいメディアは、必ずしも読書状況を悪化させる要因であるとは言いきれない。実際に、図3でカラーテレビの普及率について確認してみれば、白黒テレビの普及率と異なり、不読書率は上昇していない。同様の傾向は、携帯電話についても言える。携帯電話は、現在の若者にとって最も身近なメディアであろう。総務省による通信動向調査では、2001年より世代別の携帯電話の利用率を調査しているが、2001年は6歳から12歳で7.1%、13歳から19歳までで51.4%だったのが、2009年にはそれぞれ31.6%と84.0%へと上昇している⁹⁾。しかし確認した通り、2000年代の小中高生は、それまでよりも読書をしている。となれば、新しいメディアは、読書状況を悪化させる要因であると、単純には結論づけられない。

さらに、2007年の読書世論調査では、インターネットの利用時間別の1か月の平均読書量という興味深い調査も行われている。読書世論調査は、学校読書調査と同じく1年に1回実施されているが、15歳以上の未成年及び全年齢の成人を対象にしている点が異なる。したがって、日本人の平均的な読書傾向を知るには有用である¹⁰⁾。さて、このネットの利用時間と読書時間の調査結果によれば、インターネットをまったく利用しない人は読書をする率が低い、という結果になっている（表1）。ここからも、新しいメディアが必ずしも読書を疎外しているわけではない傾向が窺える¹¹⁾。特に2000年代には、メディアとリンクして大ヒットした作品が目につくようになる。その代表は、映画化された『ハリー・ポッター』

表1 ネット利用時間別の一か月平均読書量

	書 籍	不読書率
しない	1.0 冊	61%
30分未満	1.8 冊	38%
30～1時間未満	1.6 冊	36%
1～2時間未満	2.0 冊	35%
2～3時間未満	2.1 冊	43%
3時間以上	3.9 冊	35%

（『読書世論調査2008年版』毎日新聞社、41頁より作成）

と、携帯電話のサイトで発表された作品を書籍化したケータイ小説である。

『ハリー・ポッター』の第1巻は、日本では1999年に出版された。第2巻が2000年に、第3巻が2001年に発売されると、同じ年の12月には映画化され、その後も続刊が刊行された。学校読書調査に基づけば、『ハリー・ポッター』シリーズを読んだと回答した小中高生の延べ人数の合計は、2000年が23人、2001年が417人、2002年が1559人、2003年が2043人となっており、映画化後に上昇している様相が判明する。2002年は、小中高生のいずれの世代においても、不読書率が減少へと転じた年である。

同じような影響を与えたと考えられるのは、2001年に出版された片山恭一『世界の中心で、愛をさけぶ』であろう。映画化された2004年（5月）には、全体で804人が読んでいる。特に、高校男子は95人、中学女子は261人、高校女子は381人と多数を占めているが、2004年の不読書率はいずれも10%以上は下がっている。

同様の傾向を見て取れる作品として、あさのあつこ『バッテリー』シリーズも挙げられる。『バッテリー』は1996年に第1巻が刊行されて、2005年の第6巻で完結した。2004年以後にはランキングに挙がるようになっているが、注目すべきは映画化された2007年（3月）に、読んだ人数が前年の152人から477人へ増加した点である。その過半数を占める中学男子では、前年の86人から263人へと増えているのだが、2007年には中学男子の不読書率が8%ほど下落している。

携帯電話用のサイトで公開された小説が書籍化された、いわゆる「ケータイ小説」も、上記の映画化された書籍のブームとほぼ同じ時期に流行が始まっている。学校読書調査のランキングにケータイ小説が登場するのは2003年からだが、まだ少数であり、

本格的に読んだ人数が増えるのは2004年に入ってからである。ケータイ小説¹²⁾を読んだ合計人数は、その2004年が308人であったが、2005年が219人、2006年が241人とやや横ばいが続いた後に、2007年には1555人と急激に増える。高校女子が395人（前年は105人）であったのに対して、中学女子は1137人（前年は125人）とより多数にのぼるため、主たる対象読者は中学女子であったと分かる。そうした状況を反映して、2007年の中学女子の不読書率は、8%ほど減少している¹³⁾。

このように、他のメディアとの相乗効果は、それまで本を読む習慣のなかった小中高生に読書をするきっかけをつくる場合もあった。さらに小中学生に関しては、朝の読書運動の活発化に伴い、不読書率の減少と読書冊数の上昇が続く傾向を強めたと考えられよう。逆に言えば、高校ではそれほど朝の読書運動が定着していないために、横ばい傾向が続いていると推測できる。

ただし、こうした書籍は軽い内容のものにすぎず、古典的な名著を読まなくなったとの批判も珍しくない。それでは、学校読書調査からは、そうした変化を見て取れるのであろうか。続いては、この点について確認してみたい。

二 読んでいる本の変遷

学校読書調査では、どんな本を読んだのかを挙げてもらう調査も毎年行われている。これを調べれば、主に読まれている書籍の傾向が判明する。それでは、小中高生の読書傾向は何らかの変化が生じているのであろうか。

これに関わるものとして、すでに米谷茂則が、1950～60年代から90年代までの学校読書調査における総得票数を集計し、その上位十位のデータを提示している¹⁴⁾。ただし、2000年代に関しては集計されていないし、下位のものについてはデータがカットされている。そこで、1970年、1980年、1990年、2000年、2010年の10年ごとの各年における、小中高生が読んだ本の全得票数について、小中高生別の上位20位までのデータの集計結果を挙げてみた。順番に確認していこう。

まず、小学生である（表2）。シャーロック・ホームズシリーズや日本の歴史などが、1960年代から変わらず上位に位置する。ただし2010年には、伝記物や古典的な作品が減り、エンタテインメント的なもの

が増えている。2010年にはブームが一段落したもの、先に見た『ハリー・ポッター』シリーズはその筆頭であろう。だが、古典的な作品といえども、そもそもは小学生向けにアレンジされているのが一般的である。したがって、1960年代の小学生に比べて2000年代の小学生は、内容の薄いものしか読まなくなったという批判はやや不当であろう。

中学生の場合（表3）、1980年から古典的な作品が減少し始め、1990年にはほぼ姿を消している。そして2010年には、エンタテインメント的な作品がほぼすべてを占めるようになっていく。となると、中学生の読書状況は、1980年から1990年にかけての変化が、現在まで続いていると言えよう。

ただし、いわゆる名著を読むべきと見なされているのは、小中学生よりも高校生であろう。その高校生の読書（表4）には、中学生と同様の傾向をさらにはっきりと見て取れる。

1980年には、1970年にランクインしていたような古典的作品が半分ほどに減っている。その代わりに刊行年の新しい作品が登場している。注目すべきは、それらの多くがTVドラマ化または映画化された作品という点であろう。五木寛之『青春の門』（1970年刊、1975・77年映画化、1976・77年TVドラマ化）・同『四季・奈津子』（1979年刊、1980年映画化）のような現代小説、井上靖『天平の甕』（1957年刊、1980年映画化）のような歴史小説、小松左京『復活の日』（1972年刊、1980年映画化）・半村良『戦国自衛隊』（1975年刊、1979年映画化）のようなSF小説、山本茂実『あゝ野麦峠』（1968年刊、1979年映画化）のようなノンフィクションなど、いずれも1970年代後半から1980年にかけて映像化されている。

たとえば、『青春の門』を読んだ人数について「学校読書調査」の調査結果を見てみよう。本書は、高校生でしかランクインしておらず、1973年は6人、1974年では90人である。これが映画化された、1975年には242人に増えており、その後の1976年には91人、1977年には60人と減少していく。ただし読んだ人数の合計は、先に見たハリー・ポッターシリーズやケータイ小説ほど多数ではない¹⁵⁾。それゆえに、不読者率の低下にはつながらなかったと思われる。

同じく興味深いのは、1973年に出版された五島勉『ノストラダムスの大予言』であろう。1973年の中高生の読書人数が186人にものぼった後は、続刊が

表2 小学生が5月一か月間に読んだ本

1970 年		1980 年		1990 年	
シャーロック・ホームズ	173	江戸川乱歩シリーズ	192	日本の歴史	406
イソップ物語	168	日本の歴史	123	ヘレン・ケラー	96
野口英世	145	怪盗ルパン	112	ナイチンゲール	73
怪盗ルパン	139	トム・ソーヤーの冒険	102	エジソン	67
シートン動物記	131	野口英世	100	野口英世	64
日本の昔話	118	エジソン	94	日本の昔話	59
若草物語	111	日本の昔話	92	あしながおじさん	51
小公女	110	若草物語	87	ドラゴンクエスト	50
アンデルセン童話	99	ヘレン・ケラー	74	魔女の宅急便	50
日本の歴史	91	一休さん	71	武田信玄	47
フランダースの犬	82	先生のつうしんぼ	71	赤毛のアン	41
アルプスの少女	79	赤毛のアン	61	西遊記	41
グリム童話	75	キュリー夫人	58	若草物語	41
家なき子	71	小公女	56	織田信長	40
ヘレン・ケラー	71	ナイチンゲール	53	怪盗ルパン	40
江戸川乱歩シリーズ	66	ベープ・ルース	46	シャーロック・ホームズ	39
キュリー夫人	65	ふしぎなかぎばあさん	41	世界の歴史	39
リコはおかあさん	64	アンデルセン童話	40	キュリー夫人	38
ピノキオ	61	シートン動物記	39	シートン動物記	36
宝島	55	チョコレート戦争	39	イソップ童話	31
2000 年		2010 年			
日本の歴史	182	日本の歴史	68		
学校の怪談	101	三国志	39		
江戸川乱歩シリーズ	89	ふしぎの国のアリス	25		
はだしのゲン	77	恐竜の谷の大冒険	19		
シャーロック・ホームズ	66	シャーロック・ホームズ	19		
ヘレン・ケラー	63	化け猫レストラン	18		
五体不満足	54	若おかみは小学生！	18		
野口英世	41	織田信長	17		
エルマーのぼうけん	38	ヘレン・ケラー	17		
それいけズッコケ三人組	33	IQ 探偵ムー			
アンネ・フランク	31	そして彼女はやって来た	15		
エジソン	31	お化け屋敷レストラン	15		
日本の昔話	28	かいけつゾロリたべるぜ！			
ベートーベン	28	大ぐいせんしゅけん	15		
ベープ・ルース	27	ダレン・シャン 1	15		
ハッピーバースデー	25	ぼくらの七日間戦争	15		
赤毛のアン	21	イチロー	14		
ナイチンゲール	21	恋空	14		
ライト兄弟	19	秘密のとびられすとらん	14		
怪盗ルパン	18	殺人レストラン	13		
		ベートーベン	13		
		死神レストラン	12		

※各年の学校読書調査より作成。各年において、読んだ本として挙げた人数が多い順に上位20位までを挙げている。左欄が書名、右欄がその本を上げた人数。

1979年の年末に刊行されるまでランキングから姿を消すが、1980年には再び読書人数が68人に上昇した。1981年には87人にはさらに増えたものの、1982年には24人とブームは去っていくが、現在から見れば本書は、サブカルチャー的なエンタテインメント作品の先駆けと言えるのではなかろうか。実際に1990年には、アニメやゲームなどのサブカルチャー的な世界観を反映した小説が、ランクインし始めている。藤川桂介『宇宙皇子』、水野良『ロードス島戦

記』、氷室冴子『なんて素敵にジャパネスク』、田中芳樹『銀河英雄伝説』・『創竜伝』・『アルスラーン戦記』などである。なお、先に挙げた米谷の調査では、1980年代全体では『なんて素敵にジャパネスク』（277票）と『宇宙王子』（240票）が第1・2位を占めている。第3位は夏目漱石『心』（189票）だが、第4・6・10位に赤川次郎の作品がランクインし、『ノストラダムスの大予言』（131票）も第7位となっている¹⁶⁾。こうした状況は、2000年代に入るとますます

表3 中学生が5月〜1か月間に読んだ本

1970 年		1980 年		1990 年	
シャーロック・ホームズ	175	坊っちゃん	131	三国志	87
坊っちゃん	151	江戸川乱歩	98	シャーロック・ホームズ	87
怪盗ルパン	144	怪盗ルパン	86	江戸川乱歩シリーズ	83
赤毛のアン	99	赤毛のアン	57	怪盗ルパン	83
江戸川乱歩	73	中学生日記	54	日本の歴史	75
吾輩は猫である	72	アンネの日記	52	ロードス島戦記	58
次郎物語	47	シャーロック・ホームズ	51	ドラゴンクエスト	57
若草物語	46	ガラスのうさぎ	43	さようならこんにちば	46
二十四の瞳	45	二十四の瞳	35	あしながおじさん	42
十五少年漂流記	41	ノストラダムスの大予言	31	武田信玄	35
アンネの日記	40	復活の日	31	ぼくらの七日間戦争	33
星の王子さま	38	トム・ソーヤーの冒険	30	キッチン	32
エドガー・アラン・ポー集	37	吾輩は猫である	30	桜の下で逢いましょう	32
あしながおじさん	35	戦国自衛隊	25	赤毛のアンシリーズ	29
怪談	32	若草物語	24	2100 年の人魚姫	26
戦争と平和	28	あしながおじさん	23	宇宙皇子	26
ケネディ	25	路傍の石	23	TUGUMI	24
車輪の下	25	にんじん	20	吾輩は猫である	24
ああ無情	24	伊豆の踊子	17	天使の降る夜	22
ジューン・エア	24	機動戦士ガンダム	17	エンジェル・ティアールが聴こえる	21
少年少女世界文学全集	24	次郎物語	17		
路傍の石	24				
2000 年		2010 年			
だから、あなたも生きぬいて	108	恋空	65		
五体不満足	89	リアル鬼ごっこ	64		
ハッピーバースデー	48	バッテリー	38		
江戸川乱歩シリーズ	36	三国志	37		
シャーロック・ホームズ	30	ホームレス中学生	33		
封神演義	30	親指さがし	32		
学校の怪談	24	×ゲーム	27		
少年 H	24	白いジャージ	25		
空想科学読本	21	シャーロック・ホームズ	23		
赤毛のアン	19	赤い糸	21		
さくら日和	18	パズル	21		
怪盗ルパン	17	君空	18		
スター・ウォーズ	16	告白	18		
ラグナロク	16	レンタル・チルドレン	15		
カラフル	13	A コース	14		
創竜伝	12	デュラララ!! 3	14		
ハリー・ポッターと秘密の部屋	12	あそこの席	13		
本当は恐ろしいグリム童話	12	怪盗ルパン	13		
銀の海、金の大地	11	西遊記	13		
さるのこしかけ	11	僕の初恋をキミに捧ぐ	13		
もものかんづめ	11				

※各年の学校読書調査より作成。各年において、読んだ本として挙げた人数が多い順に上位 20 位までを挙げている。左欄が書名、右欄がその本を上げた人数。

す顕著になり、いわゆる名著は姿を消していく。

読書傾向の変化が、高校生全体の状況の変化に基づくとは考えにくい。高校進学率は、文部科学省による「学校基本調査」の「進学率（昭和 23 年〜）」によれば¹⁷⁾、1950 年には男子が 48.0%、女子が 36.7%に留まっていたが、1970 年には男女共に 80%を超えると、1975 年には 90%を上回り、その状況が現在まで続いているからである。となれば、中高生の読書傾向は、1980 年ごろから変化していると言える。

ところで、小中高生が 1 か月間に読む本をもう一度眺めれば、ノンフィクションがほぼ挙がっていない事実気づく。フィクションの描かれた小説を楽しむのは同じであるものの、その対象が古典的小説からサブカルチャー的な小説へと変化したわけである。

それでは、古典的小説が読まれなくなった理由は何であろうか。最大の理由は、時代背景が違うために、内容を理解しにくい点であろう。これについて

表4 高校生が5月〜1か月間に読んだ本

1970 年		1980 年		1990 年	
友情	50	赤毛のアン	59	宇宙皇子	54
車輪の下	48	復活の日	57	ロードス島戦記	51
野菊の墓	47	青春の門	48	三国志	48
赤頭巾ちゃん気をつけて	42	ノストラダムスの大予言	37	ノルウェイの森	39
シャーロック・ホームズ	40	こころ	33	キッチン	35
こころ	38	四季・奈津子	31	赤毛のアン	34
女の一生	35	老人と海	29	オンディーヌの聖衣	31
ジューン・エア	33	人間失格	22	TUGUMI	30
どくとるマンボウ	28	シャーロック・ホームズ	19	愛する君のために	27
嵐が丘	27	坊っちゃん	19	さようならこんにちは	24
戦争と平和	26	怪盗ルパン	15	なんて素敵にジャパネスク	23
坊っちゃん	24	戦国自衛隊	15	創竜伝	22
狭き門	19	初恋	14	ロマンス	21
橋のない川	19	友情	14	銀河英雄伝説	20
怪盗ルパン	17	あゝ野麦峠	13	シャーロック・ホームズ	19
カラマーゾフの兄弟	17	天平の甍	10	後宮小説	18
雪国	17	鼻	10	こころ	18
若きウェルテルの悩み	17	飛翔	10	アルジャーノンに花束を	17
愛と死	16	ようこそ地球さん	10	機動戦士ガンダム	
赤毛のアン	16			閃光のハサウェイ	17
				アルスラーン戦記	16
2000 年		2010 年			
だから、あなたも生きぬいて	161	告白	72		
五体不満足	33	リアル鬼ごっこ	26		
永遠の仔	29	スイッチを押すとき	21		
シャーロック・ホームズ	19	余命一か月の花嫁	21		
創竜伝	19	デュラララ!! 1	18		
三国志	16	デュラララ!! 2	16		
僕は勉強ができない	15	デュラララ!! 3	16		
“It (それ)” と呼ばれた子	14	1Q84 1	14		
ラグナロク	14	白いジャージ	13		
アナザヘヴン	13	あそこの席	12		
キッチン	13	パズル	12		
本当は恐ろしいグリム童話	13	×ゲーム	11		
ハリー・ポッターと賢者の石	11	teddybear	11		
燃えよ剣	9	オール	11		
アムリタ	8	“It (それ)” と呼ばれた子	10		
車輪の下	8	A コース	10		
小説ドラゴンクエスト	8	植物図鑑	10		
氷点	8	あおぞら	8		
カラフル	7	アバター	8		
さくら日和	7	王様ゲーム	8		
十七歳	7	生徒会の一存	8		
水滸伝	7	デュラララ!! 5	8		
デモン・スレイヤーズ!	7	図書館戦争	8		

※各年の学校読書調査より作成。各年において、読んだ本として挙げた人数が多い順に上位 20 位までを挙げている。左欄が書名、右欄がその本を上げた人数。

は、『読書世論調査 1997 年版』における「古典・名作や現代作品の読まれ方」という記事にて、すでに指摘されている。それによれば、『坊っちゃん』を読んだ生徒は、1968 年に比べて確実に減少している。たとえば 1968 年には、小学生の 11.6%、中学生の 41.2%、高校生の 59.0%が読んだ経験があったものの、1988 年にはそれぞれ 11.1%、23.8%、41.6%に下落し、1996 年には 7.1%、19.2%、32.0%とさら

に減少している。これは、先に見た 1980 年代から読書傾向が変化した様相と、おおよそ一致している。この調査結果に対して、「昔の人なら『坊っちゃん』の滑稽さは分かったが、現代っ子にとってはユーモアを感じにくく、とっつきにくい小説になっている」¹⁸⁾とのコメントがある。1 世紀近くも前に書かれた作品を、予備知識もなく楽しんで読み進めるのが困難なのは、何ら不思議ではない。

とはいえ、サブカルチャー的な作品には、マンガやアニメ、さらにはRPG（ロール・プレイング・ゲーム）を下敷きにしつつ、異世界を舞台にしているものも多い。だが、知識がないために理解ができないという事態は生じず、若者に受け入れられているのはなぜだろうか。重要なのは内容ではなく、そうした作品の構造である。こうしたサブカルチャー的な作品が持つ構造の特徴については、すでに論じられている¹⁹⁾。

マンガでは、登場人物が「キャラ」として表現される。これは、それまでの文芸作品に見られた、内面を有する架空の人物たる「キャラクター」とは微妙に異なる。なぜならばキャラは、図像によってまずは認識されて、類型化された記号のような役割を果たすからである。他方、RPGにもこうしたキャラが登場し、主としてプレイヤー側が動かす登場人物にも、それぞれの職業という役割分担が与えられる。さらに彼らは、パラメータという数値によって能力を表される点で、内面を有するキャラクターではなく、記号化されたキャラに近い。マンガやRPGなどですでに現れていたこのような類型化されたキャラが、サブカルチャー的な小説にはしばしば登場している。類型化されたキャラが様々なサブカルチャー作品に共通しているのだから、たとえ舞台や物語が異なろうとも、キャラという存在からその世界観を受け入れるのは容易となるわけである。

こうした点を踏まえれば、RPGを小説化した『小説ドラゴンクエスト』や『ロードス島戦記』などのサブカルチャー的な作品が、1990年代に登場したのは決して偶然ではなかろう。それらは、たとえ現代社会から遠く離れた架空世界を描いていても、その構造という点において、若者たちを惹きつける素地を備えていたわけである。つまり、現実社会についての「リアリティ」が欠如しても、若者にとっては自分たちの身近に存在するかのよう「リアル」な感覚がそこから読み取れると言える。『ハリー・ポッター』シリーズが魔法を扱うファンタジー小説でありつつ大ヒットしたのは、こうした1990年代のサブカルチャー的な作品の流れの延長線上にあると考えられよう²⁰⁾。

さらに、この「リアリティ」ではなく「リアル」という感覚が重視されるのは、ケータイ小説についても同様である。ケータイ小説についても、主たる読者である中高生の女子にとって、登場人物の言動に現実感があるかよりも、自分たちのすぐそばにあ

るように感じる親近感のあるリアルさが重視されているとの指摘がなされている²¹⁾。

すでに見たとおり、1980年代は不読書率が増加し続けていた時代である。そのころ、中高生の間では過去の読書傾向からの変化が生じ、不読書率が減少する2000年代には、メディアとリンクした作品やサブカルチャー的な作品が、読書対象のほとんどを占める状態へ変わったと言えよう。

とはいえ、先に不読者率の低下を概観したように、読書をする若者がかつてよりも増えているのは事実である。これもすでに確認した通り、朝の読書運動が読書指導に果たした役割が大きい。いわば、読書を行う習慣に対する指導法は、それなりの効果を上げていると言える。となれば、そうした若者をさらに深い思索へと誘う書籍へ促すための方法論が続いて検討されるべきであろう。そこで、読書指導の現状を確認しつつ、さらなる読書指導の方法論の提示を試みてみたい。

三 若者の読書と推薦図書の問題

生徒をさらに深い読書の世界へと誘うには、導く側の立場である教員がそれに対する知識を蓄えておき、児童や生徒の求めに応じて適切な書籍を薦められるように備えておく必要がある。それでは現在の教員は、小中高生へ読書に関する適切な助言を行い得ているのであろうか。

現在の状況を間接的に確認しうるデータが、学校読書調査にいくつか見られる。たとえば、先に見た2007年の学校読書調査にて行われた、全校一斉読書で何が変わったと考えたかについての調査である。すでに確認したとおり、本を読むことが増えたと答えた小中高生は多い。にもかかわらず、先生と本の話をするようになったとの回答は、最も高い小学生女子で2.1%、最も低い高校生男子は0.5%にすぎない。これは、読書習慣が身に付いたとしても、教員とは読書の話をしていない状況を示している²²⁾。

さらに、教師の側からきちんと指導ができていない実態は、2010年の学校読書調査にて行われた、本を選ぶ際の基準に関する調査から判明する（表5）。「先生のすすめ」と回答した者は極めて少なく、小中高生の男女すべてにおいて最低である。これでは、現場の教師によって、具体的な読書指導が行われていると想定できない。

そもそも読書をしていなければ、若者と本の話は

表5 本を選ぶときの基準は何か（複数回答可）

	小男	小女	中男	中女	高男	高女
表紙	37.4	44.4	41.3	52.5	33.5	41.1
本の題名	60.8	62.5	54.8	53.0	42.1	44.2
活字の大きさ	8.7	15.4	6.5	7.7	3.6	6.3
本の大きさや重さ	14.0	11.4	10.6	7.3	6.2	6.8
本の値段	19.7	13.2	19.5	17.4	19.4	17.0
友だちのすすめ	21.6	28.6	22.3	30.0	24.0	31.1
家族のすすめ	10.2	13.6	6.3	6.7	3.7	3.8
先生のすすめ	4.8	6.7	1.9	2.0	1.8	2.2
世の中の人気や評判	19.7	15.5	23.6	25.0	39.6	36.5
新聞や雑誌の広告	5.4	7.3	7.1	11.4	9.5	13.8
好きな作家	14.9	25.4	19.9	33.7	29.7	34.4
映画やテレビの原作	31.4	24.5	35.9	34.8	27.4	26.9
その他	10.8	10.9	11.5	9.7	8.9	9.2
無回答	0.3	0.3	1.0	0.4	0.8	0.3

（「学校読書調査」（2010 年）より作成）

できないであろう。実は1960年代から、生徒よりも教員こそが読書をしていないのではないかと、という批判が見られる²³⁾。自らの読書経験が乏しければ、生徒に推薦すべき書籍を見出すことは不可能に近い。となれば、他者が作成した推薦図書のリストに頼らざるを得ない。それでは、そうした推薦図書は現在の小中高生の状況を踏まえたものとなっているのであろうか。

学校における読書指導は様々な方法論に基づいて実施されてきたが、推薦（必読）図書の紹介は、戦後から行われ続けてきた²⁴⁾。その代表例として挙げられるのは、全国学校図書館協議会必読図書委員会が編集している『何をどう読ませるか』であろう。本書は小中高生別の各巻に分かれており、それぞれの巻で推薦図書を挙げてその解説を行っている。加えて、さらなる指導をする際にはどのような図書があるのかも、それぞれの著作ごとに補足図書として2～5冊ほど挙げられている。先述の通り、名著を読むべきと特に見なされているのは高校生と思われるので、高校生用の『何をどう読ませるか』第6訂版（2000年）について見てみたい。

挙げられている作品は、『アンネの日記』や『こころ』などの古典的な作品から、『TUGUMI』のような新しい作品までを含む50冊である。サブカルチャー的なライトノベルやマンガは、推薦図書として挙げていない。補足図書に、関川夏央・谷口ジロー『かの蒼空に』（『石川啄木』、このカッコ内は推薦図

書（以下同じ）と手塚治虫『陽だまりの樹』（『学問の花ひらいて』）が、わずかながら挙げられているくらいである。

ただし、サブカルチャー的な作品の例として先に挙げた『小説ドラゴンクエスト』や『ロードス島戦記』へ言及している箇所がある。だがそれは、推薦図書や補足図書としてではない。「読書材として価値の高い作品が、時流に乗った作品の陰に隠れて見えなくなることが多い」（22頁）という否定的な対象の例として挙げられているのである。ここには、大人の勧める「良い」読書と若者の読書との乖離が、明らかに見て取れる。

これに関連して、『ハリー・ポッター』と往年の定番的なファンタジー作品である『ゲド戦記』とを比較した、赤木かん子の指摘に触れておきたい。前者の主人公であるハリーは、努力せずとも大人たちによって解決策を提示してもらえる場合もあるが、後者の主人公であるゲドは、自分自身で苦しみながら努力して困難を乗り越える場面が続く。したがって、前者を読んだ若者が、後者を薦められても読み進めるのは難しい、と主張している²⁵⁾。その一方で、先に触れた『何をどう読ませるか』の高校生版には、『ゲド戦記』が補足図書としてあげられている（86頁）。上記の通り、学生が読む書籍の傾向は1980年代から変化しているのに、それに対応した読書指導が適切になされていない状況が、垣間見えるのではなかろうか。

若者が好む書籍を基にした読書指導の重要性については、読書傾向が変化しつつあった1980年に、越谷和子がすでに指摘している。越谷が例に挙げたのは、星新一の短編である。そこには、ペーソスと比喩、幻想的な美、現実的な醜などの観念や感覚が含まれており、読み手が想像の翼を広げさせる余韻すらあると見なす。その上で、高校生はその面白さを自発的に見つけ出したのであり、そこから読書離れを改善できるのではないかと提言している²⁶⁾。

そもそも越谷がこうした提言を行ったのは、そのような指導が十分になされていないとの懸念があったからだろう。実際に、1960年代から、推薦図書は画一的に「良い」図書を提示するだけに留まっているのではないかと、という疑問が呈されていた²⁷⁾。事実、画一的な選書を超えて、若者の状況を踏まえた上で推薦図書を挙げている論者は、特に目立っては見られない。ライトノベルや少女小説を視野に入れた指導の重要性を、1980年代から訴え続けた赤木かん子が挙げられるくらいである²⁸⁾。

こうした指導は、読書をするようになったものの、本格的な読書にはまだ不慣れな若者も多い現在にこそ必要となるはずである。だが、不読書率が減少した2000年代に入ってから、そうした指導を具体的に語っている論者はほとんどいない。勤務先の中学校での梨木香歩『西の魔女が死んだ』や筒井康隆『時をかける少女』を自ら選書して、読み聞かせを続けた宮本由里子や、流行の本を読む中学生との会話を通じて、それぞれに向いている本を薦めた小幡章子らが確認できる程度にすぎない²⁹⁾。これは、若者の読書と大人の読書を結びつけるような、実践的な指導を体系立てようとする動きがほとんど見られない状況を物語っている。不読書率の減少や読書冊数の増加は、地道な読書教育のおかげでもあるだろう。だが、それを踏まえた上で、さらに深い読書世界へと誘う方法論は、まだ十分な議論の対象になっていないと言える。

子供の頃から読書に親しみ、古典的な作品も読んだ経験があると、安易に同じような読書を勧めようとする場合がある。そうした自己の経験に基づく読書教育を否定するわけではない。だがそれでは、読書に親しみがない「生徒たちへの目に見えないプレッシャー」³⁰⁾になってしまいかねない。残念ながら、軽い図書ではなく良い図書を読むべし、というお題目だけが、内実を伴わずに訴えられ続けている。この状況こそが、読書をめぐる生徒と教師の間の断絶

を深め、生徒の読書環境のさらなる改善を阻んでいるように思える。読書習慣が身に付き始めたばかりの生徒に対して、いきなり古典的な作品を薦めた結果として拒絶反応を示されて終わるよりは、現状に応じた図書の推薦方法を考えるべきであろう。

繰り返しになるが、2000年代には不読書率が減って読書冊数も増加傾向にある。サブカルチャー的な流行作品を主として読んでいるとしても、読書習慣を身に付けている若者は増えている。ならば、より文化的または知的な作品へと誘いたいのであれば、サブカルチャー的な作品と結びつけながら、古典的な小説や学術書を推薦すべきではなかろうか。

たとえば、『小説ドラゴンクエスト』や『ロードス島戦記』を端緒として、現在も若者の主たる読書ジャンルとなっているファンタジー小説を読んだ者には、どのような書籍を薦められるであろうか。『小説ドラゴンクエスト』の元になっているゲームの『ドラゴンクエスト』シリーズにはしばしば教会が出てくる。その教会のCGは、十字型をしていることもあれば、尖塔を伴っている場合もあり、内部にはしばしばステンドグラスが描かれている。しかし、教会の形や尖塔、ステンドグラスには、キリスト教の教義と建築学的な問題が組み合わさった必然的な意味がある。これを知るためには、馬杉宗夫『大聖堂のコスモロジー——中世の聖なる空間を読む』が入門書となりうる。中世ヨーロッパとキリスト教の歴史について、教会建築というビジュアル的な観点から学べるため、初学者にも取っ付きやすい。加えてそれらの作品では、姫君との恋物語をはじめとする恋愛が、ゲーム内のイベントの題材となる場合もある。しかし、これらの作品のモチーフとなっている中世ヨーロッパでは、そもそも恋愛という概念が希薄であり、少しずつそのような考え方が「発見されて」きたと捉えられている。こうした事情を知るためには、阿部謹也『西洋中世の男と女』や本村凌二『ローマ人の性と愛』などを紐解いてもらえばよい。人間に普遍的に備わっているように思える「愛」という感情さえも、歴史的に作り出されてきた事実を通じて、歴史の面白さを味わってもらえるのではなかろうか。

そうしたファンタジー作品には、しばしば魔術が登場する。魔術は、前近代的な迷信に連なるのであり、近代的な科学に対置するものと見なされる場合がある。しかしながら、こうした啓蒙主義的な二項対立の世界観は、近代思想史や科学史を紐解けば、

単純すぎるものであると理解できる。たとえば、澤井繁男『ルネサンス』では、一般的に近代の端緒と見なされる時期に、自然の構造や内実を知ろうとする行為が自然魔術と称されていた様相を確認できる。さらにいえば、村上陽一郎『新しい科学論』からは、中世までのキリスト教的な思想こそが近代科学の発想の根源に位置している実態を見て取れる。したがって、ファンタジー世界の魔術や宗教を、非科学的な迷妄と断じるのは危険であり、そうした世界観を持つ作品に内在された論理から近代に通じる概念をも読み取れる可能性もありうる。

ところでRPGには、自分たちが操るキャラクターだけではなく、街のなかには様々な人物が暮らしている設定になっている。そのなかには、道具や武器・防具を売る商人もいるが、大半の人物は街のなかをうろついているだけである。それでは、彼らは働かずにただぶらぶらして暮らしているのであろうか。実はそもそも前近代の人間は、現代のように日中のすべての時間を労働に費やしていたわけではない。武田晴人『仕事と日本人』を読めば、産業革命に至るまでのヨーロッパ人は、時間に追われながら働くような勤勉さを持ち合わせていなかったと分かる。そして日本でも事情は変わらない。明治期に来日したヨーロッパ人は、しばしば日本人は怠惰であり真面目に働かないと書き残しているからである。それを踏まえて夏目漱石『それから』に目を通せば、働きもせず気ままに暮らす主人公の代助に対して歴史的状況を踏まえつつ読み進められるのではなかろうか。

対象となっているのがファンタジー小説であるため、事例が西洋史関係に偏ったものの、ここで挙げた書籍はいずれも新書や文庫であり、高校生であれば、すべてを理解できなくても読み通すのは決して困難ではない。マンガやライトノベルのすべてについて、このような図書紹介はできなくても、自分の専門としている分野に関する図書の紹介は行えるであろう。そのうえで他の教員と連携していけば、読書指導が全体として深まっていくに違いない。その際に、お互いの推薦書とその方法論を持ち寄っていけば、生徒に応じた具体的な指導法も少しずつ積み上げられていくのではなかろうか。内容を自ら確認もせず古くからの推薦書を勧めたり、自分がかつて読んできた「良書」を安易に押しつけたりするだけでは、状況は何も変わらないであろう。自らも読書の世界にきちんと踏み込み、必要に応じてその良

さを児童や生徒の趣味や考えに絡めつつ推薦するという努力の先に、読書状況のさらなる改善もあると思われる。

おわりに

主として学校読書調査を用いながら、小中高生の読書について検討を進めてきた。結果として、以下の3つが明らかとなった。まず、2000年代に入って読書をしない小中高生は減り、読書冊数も増えた事実である。続いて、どのような本を読むのかについては1980年ごろにはエンタテインメント的な方向へと変わり始めたことである。最後に、そうした状況に対応して、若者をさらに深い内容を伴う書籍の読書へと誘うためには、若者の状況と関連して書籍を推薦すべきである、という点である。若者の読書に問題があると考えているのならば、それを若者の問題としてかたづけず、年長者の側もそれに真摯に向き合わねばならないと言えよう。

ところで、大学生においても、対象読書の変化が1980年ごろに生じていたようである³¹⁾。1980年に大学生であった若者は1970年代には小中高生であった。となれば、若者の読書状況の問題は、1980年代以後に限られるわけではないであろう。したがって、1970年以前の読書状況とそれを巡る言説の検討も必要となろう。これらについては稿を改めて論じたい。

注

- 1) “小学生の読書離れ一段と進む”『学校図書館』541、1995、15-17。
- 2) 学校読書調査は、同じく毎年行われる読書世論調査と一緒に『読書世論調査（～年版）』として毎日新聞社から調査の翌年に出版される。ただし、ある年度の調査は翌年版に収録される（たとえば、2014年の調査は2015年版に掲載）。以下、調査そのものに言及する場合には「～年の調査」、本書へ言及する際には『読書世論調査～年版』とそれぞれ表記する。
- 3) 毎年の『読書世論調査』にて「調査のあらまし」の項目に書かれているとおり、対象時期が6月なのは、入学時期や新学期の繁忙期を脱し、また、期末あるいは中間テストなども実施されていない頃で、平常の姿で学習が進められている時期という理由に基づく。教科書・学習参考書・マンガ・雑誌とその付録は対象に含めず、その旨はアンケート時にも伝えられる。なお、読書に関する諸調査は、毎年異なったテーマについて

行われている。

- 4) これも調査時期と同じように、『読書世論調査』にて「調査のあらまし」の項目に書かれている。小中学生については、全国の市町村を大都市（政令指定都市）、中都市（人口20万人以上の都市）、小都市（人口20万人未満の市）、郡部（町村）の4つに分類し、各分類に在籍する児童・生徒数の比率に応じて対象校を定める。高校生については、全日制を9学科に分類し、在籍生徒数の比率に応じて対象校を定める。そのうえで、対象校ごとに、小学生は4～6年生、中学生は1～3年生の各学年1学級を選び、学級全員を対象とする。2014年の調査では、小学生4179人、中学生4499人、高校生4065人が対象となっている。より詳しい比率などは『読書世論調査2015年版』、69を参照のこと。
- 5) 末次則子・今村秀夫“子どもの読書実態と調査—読書と豊かな人間性”『読書と豊かな人間性』（「新学校図書館学」編集委員会編）東京、全国学校図書館協議会、2006、22-26、神永正博『不透明な時代を見抜く「統計思考力」—小泉改革は格差を拡大したのか？』東京、ディスカヴァー・トゥエンティワン、2009、40-43、秋田喜代美・庄司一幸編『本を通して世界と出会う—中高生からの読書コミュニティづくり』京都、北大路書房、2005、6-7。なお、天道佐津子も1969年から2004年までの調査をまとめているが、小中学生の読書傾向の改善に触れつつも、不読者もいる点にむしろ注意を向けている（天道佐津子“子どもたちはどのくらい本を読んでいるか”『読書と豊かな人間性』（「新学校図書館学」編集委員会編）東京、全国学校図書館協議会、2006、31-49）。
- 6) 米谷茂則『児童主体の創造を表現する読書の学習』東京、高文堂出版社、2002、12-14。
- 7) 末次則子・今村秀夫（2006）“子どもの読書実態と調査”『読書と豊かな人間性』（「新学校図書館学」編集委員会編）東京、全国学校図書館協議会、2006、24-25。なお、『読書世論調査2002年版』にも、朝の読書運動の効果について言及がある（88-89頁）。これ以外にも、朝の読書運動が与えた影響に関連する諸調査をまとめたものとして、葉袋秀樹“朝の読書の評価に関するアンケート調査—意義と問題点”『日本生涯教育学会論集』33、2012、103-112がある。
- 8) 朝の読書推進協議会の公式サイト（http://www1.e-hon.ne.jp/content/k_46-0215.html）には、最新の実施校数と実施率が掲載されている。実施率の全国平均は2015年3月現在で76%である。普及率の低い地域は、大阪・東京・神奈川などの大都市圏と北海道であ

る。

- 9) 総務省“平成13年「通信利用動向調査」の結果”、2002年5月21日公表、2015年3月31日参照、http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/data/020521_1.pdf、同“平成21年「通信利用動向調査」の結果”、2010年4月27日公表、2015年3月31日参照、http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/data/100427_1.pdf。なお、2009年におけるパソコンの利用率は、6歳から12歳で62.7%、13歳から19歳までで92.1%と、携帯電話よりもさらに高い数値を示している。
- 10) なお、読書世論調査については、永江朗が1988年から2008年の調査結果に基づきつつ書籍の読書率を比較している。そちらでも、年ごとに波はあるが50%弱で推移しており、特に増減は窺えない。永江朗『本の現場—本はどう生まれ、だれに読まれているか』東京、ポット出版、2009、114-117。
- 11) なお、同じく2007年の読書世論調査によれば、テレビの視聴時間が多いほど読書冊数は減っており、読書をしていない人の比率も高い（『読書世論調査2008年版』、40-41）。となると、読書にとっての阻害要因となっているメディアは、インターネットよりもテレビであることになる。
- 12) ケータイ小説として計上したのは、最初にネット上で公開されて後に書籍化された以下の作品である。『Dear Friends』、『Deep Love』シリーズ、『Line』、『LOVE at Night』、『LOVE Heart』、『S 彼氏上々』、『teddy bear』、『赤い糸』、『今でもキミを。』、『永遠の夢』、『幼なじみ』、『片翼の瞳』、『君がくれたもの』、『君空』、『クリアネス』、『クリーム・ソーダ』、『携帯彼氏』、『恋空』、『恋バナ』シリーズ、『心の鍵』、『この涙が枯れるまで』、『こんぺいとう』、『純愛』、『白いジャージ』、『空』、『太陽と月』、『小さな約束。』、『翼の折れた天使たち』シリーズ、『天使がくれたもの』、『ドロップ』、『泣き顔にkiss』、『被害妄想彼氏』、『プリンス』、『星空』、『もう二度と流れない雲』、『もしもキミが。』、『もっと、生きたい…』、『恋愛写真』。
- 13) なお、高校女子は2%ほど下がっているにすぎない。ちなみにその後の小中高生の合計人数は、2008年は762人、2009年は338人、2010年は213人と減少しており、ブームが一段落した状況を見て取れる。
- 14) 米谷茂則『小学校上学年児童から中学生の読書の研究』相模原、現代図書、2009。
- 15) なお、上記の映像化された作品のいずれも、『青春の門』ほどの人数ではない。たとえば1980年の学校読書

- 調査での小中高生の読んだ人数の合計数は、『四季・奈津子』は31人、井上靖『天平の甍』は10人、小松左京『復活の日』は88人、半村良『戦国自衛隊』は40人、山本茂実『あゝ野麦峠』は13人である。ちなみに、同年の『青春の門』を読んだ人数は52人である。
- 16) 米谷、前掲書、180頁。
- 17) “学校基本調査—結果の概要”『文部科学省』http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/1268046.htm。
- 18) 『読書世論調査1997年版』、121頁（コメントは森洋三による）。
- 19) 特に以下の文献を参照した。東浩紀『ゲーム的リアリズムの誕生—動物化するポストモダン2』東京、講談社（講談社現代新書）、2007、伊藤剛『テヅカ・イズ・デッド—ひらかれたマンガ表現論へ』東京、NTT出版、2005、新城カズマ『ライトノベル「超」入門』東京、ソフトバンククリエイティブ（ソフトバンク新書）、2006。
- 20) 『ハリー・ポッター』のキャラ的側面からの需要を取り上げた文献として、森有礼“現代表象文化論(1)『ハリー・ポッター』の秘密の部屋—オタク文化とハーマイオニの受容”『国際英語学部紀要<中京大学>』第4号、2004年、1-24頁が挙げられる。
- 21) たとえば以下を参照のこと。杉浦由美子『ケータイ小説のリアル』東京、中央公論新社（中公新書ラクレ）、2008、石原千秋『ケータイ小説は文学か』東京、筑摩書房（ちくまプリマー新書）、2008。
- 22) 『読書世論調査2008年版』、86-88。
- 23) 上野暁“『不読者』の前の『不読者』”『学校図書館』269、1973、16-17、白上未知子“活字離れの大人たちにすすめる—中学国語教科書の読書案内に挙げられた本”『学校図書館』533、1995、43-52、渡辺茂男“学校での図書推せん—ブック・トークとその周辺”『学校図書館』166、1964、8-11。
- 24) 1990年代には、必読図書ではなく、より柔らかいニュアンスを持つ推薦図書が用いられていくようになった。野口久美子“小学校・中学校における読書指導の実践に関する報告記事の分析—全国学校図書館研究大会を事例として”『Library and information science』62、2009、132。
- 25) 赤木かん子『子どもに本を買ってあげる前に読む本—現代子どもの本事情』東京、ポプラ社、2008、83-87。なお、現在の若者が古い本を読みにくい原因として、内容の古さのみならず、活字体の古さも挙げている（同上、35-59）。
- 26) 越谷和子「生活の中での読書の位置」『読書世論調査1982年版』東京、毎日新聞社、1982、124-25。なお、同様の指摘を行ったものには以下がある。中山春江“学校図書館とマンガ”『学校図書館』354、1980、51-54、村松正志“「軽読書」のすすめ—第21回全国学校図書館研究大会を前にして”『学校図書館』331、1978、45-48。
- 27) 赤木かん子“読書離れを考える—ただのスローガンや偏見で片づけるな”『学校図書館』499、1992、9-12、大石真“『良心的力作』のわざわざい”『学校図書館』269、1973、19-20、椎野正之“批判・高校における読書指導—現在の画一化せるそれはこれでよいのか”『学校図書館』199、1967、33-37、中山春江“学校図書館とマンガ”『学校図書館』354、1980、51-54。
- 28) 具体的なブックリストを伴っている近年の著作としては、赤木かん子編著『こころの傷を読み解くための800冊の本—総解説』東京、自由国民社、2001がある。
- 29) 宮本由里子“子どもたちに言葉のシャワーを—『連続朗読劇場』の力”『本を通して世界と出会う—中高生からの読書コミュニティづくり』（秋田喜代美・庄司一幸編）京都、北大路書房、2005、55-67、脇明子・小幡章子『自分を育てる読書のために』東京、岩波書店、2011。
- 30) 赤星隆子編著『読書と豊かな人間性』東京、樹村房、1999、84頁。
- 31) たとえば、竹内洋がまとめたデータによれば、京都大学の学生は、1980年代に入ると、思想書や教養書を読まなくなる傾向が強くなっている事実が分かる。竹内洋『教養主義の没落』東京、中央公論新社（中公新書）、2003、227。
- （付記）
本稿の作成にあたって、河村晃太郎氏から貴重な助言をいただきました。文末ながら記してお礼申し上げます。
- （ひさ あつし 非常勤講師）